明石の史跡（３１）平重衡と明石藩

山陽電鉄須磨寺駅の改札口を出ると左側に、「平重衡とらはれの遺跡」の碑文が目に飛び込んでくる（須磨の歴史２９５頁）。平重衡といえば、清盛の５男で、宗盛・知盛の同母弟。以仁王の追討（治承四年）、墨俣川の合戦などに武勇を誇り、とりわけ東大寺・興福寺の焼討は著名である。須磨寺周辺は、さすが源平古戦場に近いところであると、なんとなく素直にうけとめてしまう。

『平家物語』によれば、寿永３年（１１８４）２月７日の合戦当日、生田川の防衛ラインを突破されて、主従２騎となつた重衡。梶原景季・庄四郎高家の追撃をうけるも、屈強の名馬にまたがり、「湊河・かるも河をもうちわたり、蓮の池をば馬手に見て、駒の林を弓手になし、板やど・須磨をもうちすぎて、西をさいてぞ落たまふ」（日本古典文学大系４５．１７２－３頁）とあって、須磨は通過している。どこまで逃げおおせたかは不明とはいえ、ついに馬の後足の上部を射ぬかれ、進退きわまったとき、重衡の従者は、自分の馬の提供を命ぜられるものと判断。主人を置き去りにしてそのまま西走。残された重衡は捕虜となった。

一方、現地からの報告をまとめた勝者の側の記録（吾妻鏡）には、重衡は「於二明石浦一」生け捕られたと明記されている（新訂国史大系吾妻鏡同日条）。「須磨をもうちすぎて」とあるので、明石浦の方が、信憑性があるように思われる。

それでは須磨寺駅にある碑文の根拠はというと、文化元年（１８０４）４月刊行の『播磨名所巡覧図会』に、頼政薬師（須磨寺駅東北１００ｍ）の西に、「重衡松」の存在が明示されている。さかのぼって、元禄１４年（１７０１）１月刊行の『摂陽群談』には、須磨寺門前に、本三位中将重衡の腰掛松の俗伝が記載され、その松は枯れたとある。１００年後に「重衡松」が復活し、さらに……、いやそこまでは考え過ぎであろうか。

日本歴史学会会員 茨木 一成